

なかのたいとう

実鈴





夜空の星と
一輪の花

なかのたいとう

それは献身。

愛になる前の愛の形であつて、愛を育むためには欠かせないもの。
このお話しを書いていて強く感じたことがあります。

それがどのような形の愛であれ、愛は人生を紡ぐためには、
欠かせないものであるということです。

それはお祭りの緑日の最終日のことでした。「ぼうや、この鉢をあげよう。どうせ売れ残りだ。それにこう貧相じゃ、このあとどこへ行ったって売れやしないうさ」

男の子は目をかがやかせてよろこびました。

「ほんとに!？」

けれども男の子のお父さんは「そんなもの、もらったって」と、しぶい顔をして見せます。その鉢は、数ある鉢植の中でもただひとつだけ、花のさいていない鉢だったのです。

でも男の子は「どうしても」と言っただけで聞きませんでした。その鉢は、男の子にとって特別な鉢だったのです。

見あげる屋台には、どれも明かりがともされ、まばゆいばかりにかがやいていました。なにもかもがきらびやかで、キラキラとかがやいていました。それは植木屋の花の鉢もおなじでした。どの鉢も、どの鉢も、わたしを見て、わたしを買ってとばかりに、とびきりあざやかな色にきらめき、たくさんの花という花、それらをすべて見せつけて、めいっばいに開いていたのです。

そしてその日からでした。男の子は朝に夕、一日もかかすことなく、毎日毎日、鉢に水をやり、花の世話をするようになったのです。

「ぼくの花にさわらないで!」

それは男の子のお母さんが部屋の掃除をしようと思っただけで、鉢にさわろうとしたときのことでした。男の子は大きな声をあげてお母さんを花の鉢から遠ざけました。

「ぼくの花なの! ぼくだけのなの!」

「花なんて、さいちやいないのにねえ。それにもう時期だっつて、とっくにはずれてるじゃないか」

「いいから、もう行つて!」

男の子は、お母さんにさえ鉢をさわらせませんでした。鉢のめんどうは、すべて男の子が自分ひとりで見ていたのです。

「ねえ、ぼくの花さん? きつと花がさくよね。」

きれいな色の花がさくよね

男の子が鉢にむかっただけでかたりかれます。まだ花のさいていない鉢にむかっただけ。そのへんの草と何ひとつかわらない、花のさいていない花にむかっただけ。男の子には、もう花しか見えていませんでした。

「ぼくの花さん」



でもその鉢はちがいました。その鉢は花がさいていないどころか、つぼみさえなかつたのです。それでも男の子にはわかつたのです。ひと目見たときから、その鉢が、特別な鉢だということが。

「いいかい、ぼうや、水をやりすぎちゃいけないよ。それにへんな時間に水をやってもいけない。あきらめずに育てていれば、いつかきつと花がさくつてもんさ」

植木屋のおじさんは、にっこり笑ってそう言いました。男の子が大きく、大きく、大きく、うなづきかえます。

「ありがとう、おじさん!」

こうして男の子は、植木屋のおじさんから、その花の鉢をもらいうけたのです。

あるとき、こんなことがありました。男の子は、朝ねぼうしてしまつたのです。気づけばお日さまが高くのぼつていました。

「たいへん!」

男の子は急いで花に水をやりました。

「ごめんね、ぼくの花さん」

ところが次の日のことです。花に元気がありません。花はぐつたりとしていました。しおれていたので。

「お父さん、お母さん、たいへん!」

男の子は大きな声をだしてお父さんとお母さんのもとにかけよりました。

「ぼかだなあ、ただ水をやればいってもんじゃないだろう? へんな時間に水をやつちやいけないつて教わつたじゃないか」

「そうよ、それに水をやりすぎると根がくさるかもしれないわよ」

「たいへんだ!」

男の子は急いで部屋にもどりました。そして花のさいていない花にむかっただけ。いっしょうけんめい、あやまつたのです。

「ごめんなさい……。もうしないよ。だから、だから……。元氣になつて……。」

男の子は一晩中、鉢のそばをはなれませんでした。自分がいつまで起きていて、いつねむつたのか、男の子にもわかりませんでした。次の日の朝、鉢のそばで目をさました男の子が、よろこびの声をあげます。

「お父さん、お母さん、見て! ねえ、花が元氣になつてる!」

またあるとき、こんなこともありました。その日は天気がよく、風もこちよかったので、男の子は鉢を持って公園に出かけることにしたのです。

「落とさないよう気をつけなさいよ」

出かけるとき、お母さんがそう言っていました。そんなことは言われなくてもわかっています。男の子は笑っていました。

「もう、お母さん、気にしすぎ」

でも公園に着いた男の子は、鉢をわきにおいたまま、すぐに、おともだちと遊ぶのにむちゅうになっちゃったのです。

ふと鉢に目をやった男の子が声をあげます。

「たいへんだ！」

鉢がたおれ、土がこぼれていました。たおれた鉢はふたつにわれ、花が鉢の外にとびだしていました。男の子はあわてました。

「びっしょう！」

ところが、そのときです。たまたま通りかかった近所のおじさんが、男の子に声をかけてくれたのです。

「どれ、ぼうや、ちょっと見せてごらん」

おじさんはそう言うと、われた鉢と花を手にとって、しらべはじめました。

きてくれたのです。

「うん、だいじょうぶだ。花はおれてないから植えかえれば問題ない。ちょっと待ってなさい」

おじさんは新しい鉢を自分の家から持ってきてくれました。そればかりではありません。新しい土と肥料も持ってきてくれたのです。

「ぼうや、どうもこの花には肥料がたりないようだ。おじさんがよくしてあげよう」

男の子は顔をかがやかせました。

「ありがとうございます！」

そして次の日も、その次の日も、さらにそのまた次の日も、男の子は花のさいている花の鉢を見つめてすごしました。どれだけ見つめていても、どれだけいっしょにいても、男の子はあきませんでした。





そんなある日のことです。今まで気づかなかつたのがふしぎでならなかったのですが、男の子は、つぼみがひとつ、葉っぱのかけにかくれていることに気づいたのです。男の子はよろこびの声をあげました。

「お父さん！ お母さん！ あのね！ ぼくの花に、つぼみがついてる！」

そのつぼみは見るまに大きくなっていきました。

「そんなに見てると花がはずかしくて引っこんじゃうわよ」

お母さんが男の子に言いました。するとお父さんがおもしろがって口をはさみます。

「ぎっと、ものすごく、おくてな花なんだろう。

お母さんとは、えらいちがいだ」

「なんですって！」

お母さんが大きな声をあげました。けれどもお父さんも男の子も、くすくす笑っています。すると、おこっていたお母さんも「もう」と言って、

口もとをほころばせました。そしてけっきょく、家族三人、そろって声をあげて笑いはじめたのです。

そして、とうとう、その日がやってきました。

花がさいたのです。それは大きな大きな一輪の花でした。

でも花を見たお父さんが言いました。

「なんか、へんな色の花だなあ」

たしかにその花は、おかしな色をしていました。そんな色をした花をだれも見ることがありませんでした。でもそれは、男の子にとつては、たいした問題ではなかったのです。

「ぼくの花が！ 花がさいたよ！」

男の子は、ひとり目をかがやかせて、よろこんでいました。

「だいじょうぶかしら、どくでもあるんじゃない？」

お母さんが横から口をはさみます。男の子は大きな声をあげました。

「そんなことない！ お父さんも、お母さんも、あっち行って！」

男の子は花をかばいました。どんな花であっても花は花です。

しかもそれは、たった一輪きりの男の子の花なのです。

「ぼくの！ ぼくの花がさいたの！」

男の子は本当に、しあわせでした。

本当に、本当に、しあわせでした。

花のなかった鉢に今は花がさいているのです。

男の子にとって、これほどうれしいことはなかったのです。

「ねえ花さん、ぼくね、あのね……」

男の子が花にむかって話しかけます。話すことはつきませんでした。

男の子は一日じゅう花と話していました。

そして男の子は日がな一日、花を見つめてすごしていたのです。

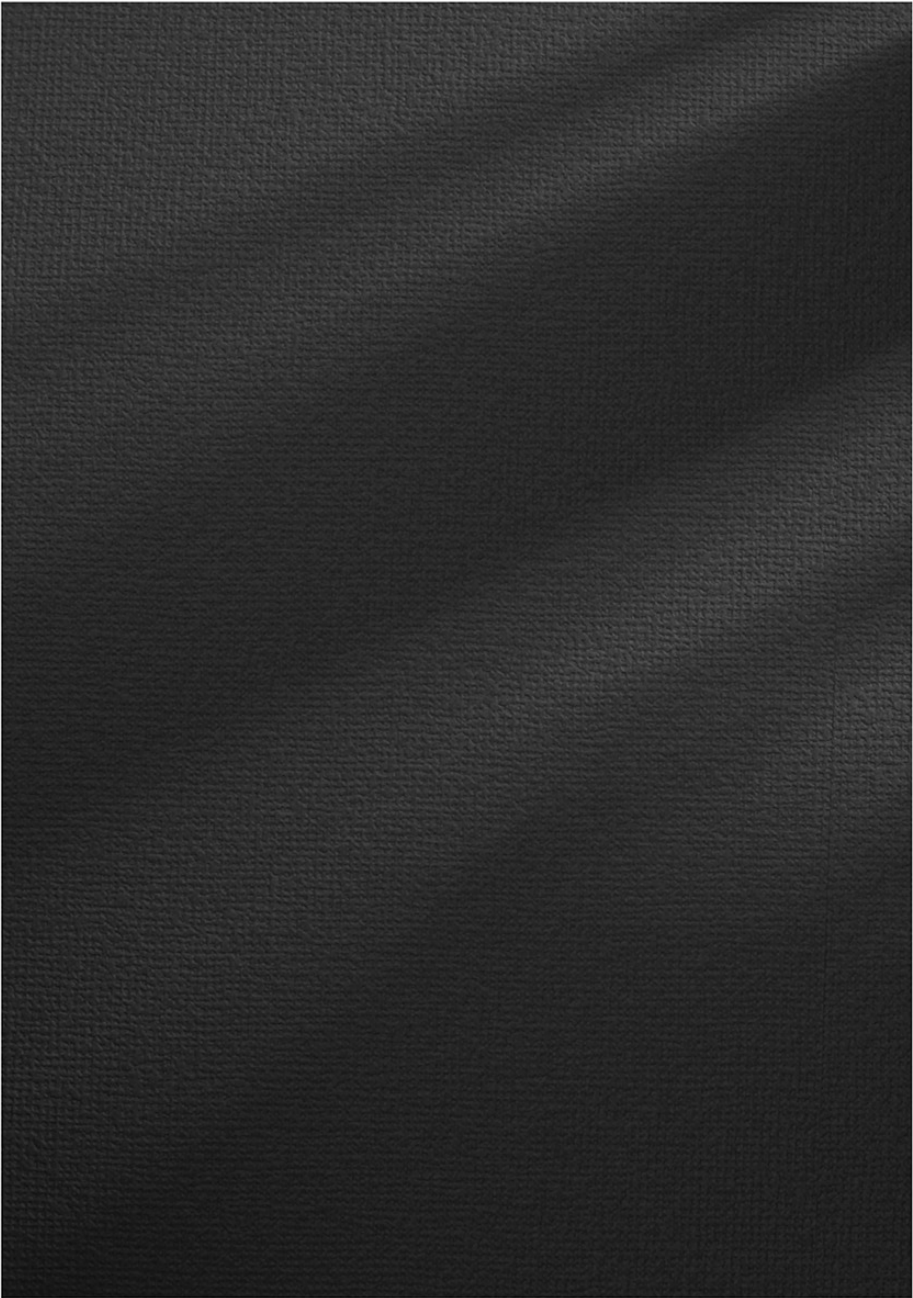
「ねえ花さん、あのね、今日ね……」

でもぞうした日々は、長くは、つづきませんでした。

お日さまの光をうけて、キラキラと七色にかがやく、

まるくて、うつくしい、シャボン玉も、やがてはパチンと

はじけてしまうものなのです。



それは、あつというまのできごとでした。男の子が花についていたほこりをはらおうと思って、ふうと息をふきかけたそのしゅんかんでした。花がぼとりと落ちてしまったのです。

「ああ、ああ、ああ！」

言葉もありませんでした。男の子は花をもとにもどそうと思って落ちた花をひろいあげ、それがあつたところにつけようとしました。けれども花はもとにもどりません。何度も何度もやってみましたが、何度も何度も。けれども、何度やってもおなじでした。花はもとにもどらなかつたのです。

目になみだがあふれてきました。あふれたなみだがこぼれ、男の子のほおをつたって、ぼとり、ぼとりとたれていきました。

花が、ちつてしまったのです。男の子の花が、ちつてしまったのです。

それからしばらくすると花だけでなく葉も落ちてしまい、茎もくたつとなつてたおれ、そのままねむるように花はかれてしまいました。鉢にはもう何ものこつていませんでした。そこに花があつたことさえ、お父さんもお母さんもわすれてしまつたようでした。

「これ、すててもいいかしら？」

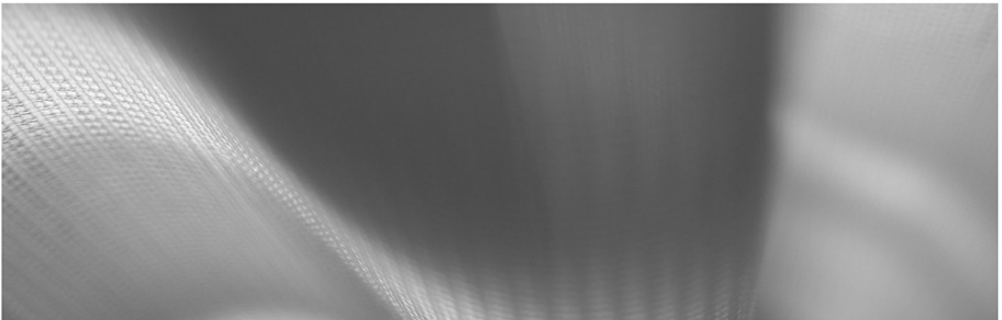
男の子はだまつて首をふりました。

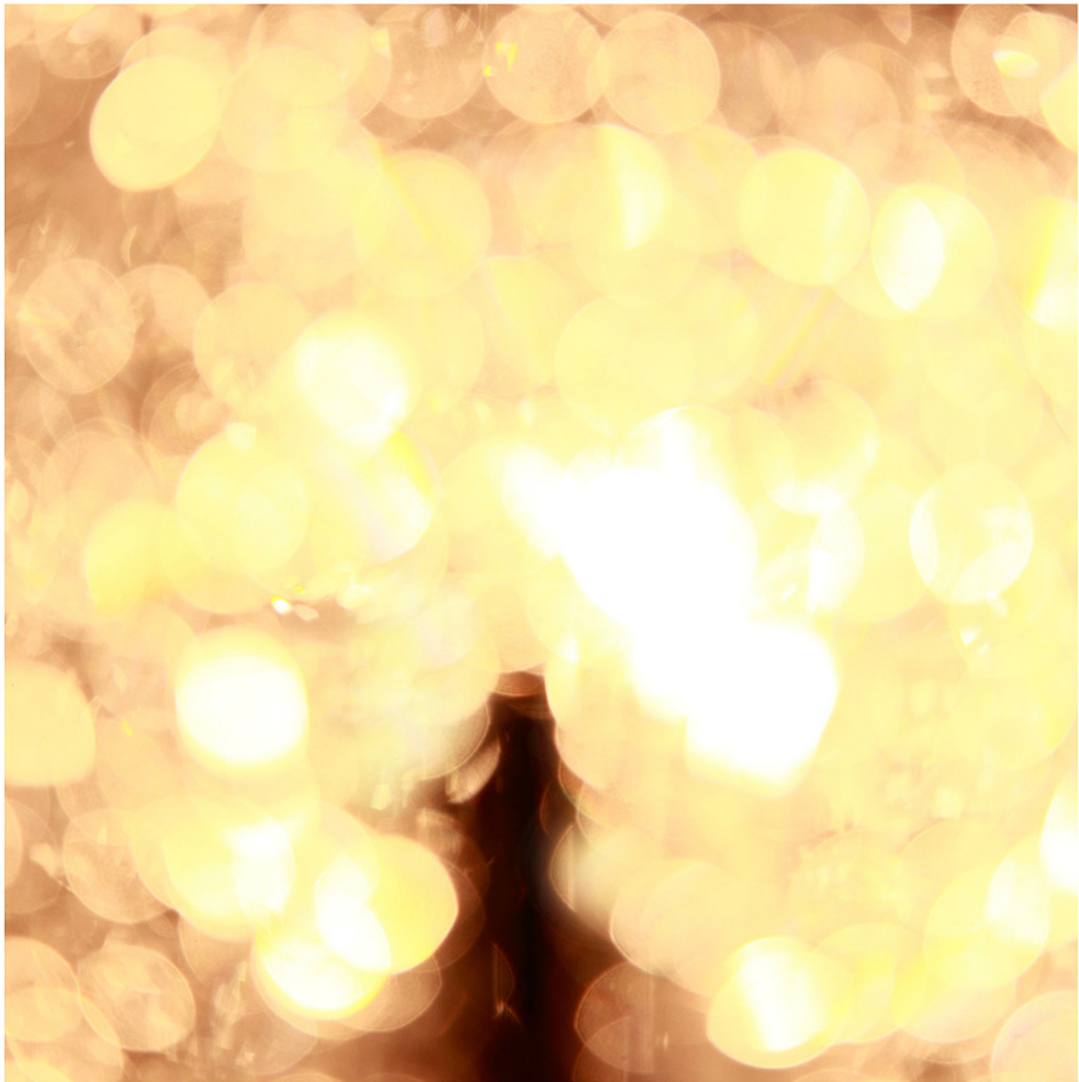
「ごみと、かわらないだろ」

男の子は首をふりつつけました。

なみだがまたあふれ、ほおをつたつていきました。

男の子は何もない鉢をただぼんやりと、ながめてすごすようになりました。男の子のほおからは、なみだのあとが消えることはありませんでした。男の子のほおには、たえずなみだながれていたのです。すきとおったはずみのような目からは、なみだが、とめどなくあふれてきます。それはいつまでたつても、かれることはありませんでした。





ある月のない夜のことです。男の子はその日も泣きつかれて、知らないうちにねむってしまったようでした。声が聞こえます。

「おねがい……、ねえ、おねがい……」

それは今にも消えそうなくらい、かぼそい小さな声でした。「おねがい、泣かないで……」

夢でした。ふりむくと、女の子がいました。

「わたしね、今夜、旅に出るの。あなたにこれをあげる」
そう言っただけの子は、男の子の手をにぎりしめました。

男の子は、はっとなつてとびおきました。部屋を出て玄関にむかい、ドアをあけて家の外へと、とびだします。そしてそのまま、道を走っていったのです。

「待って！ これを！ これを！」

男の子は星空にむかつてさげんでいました。にぎりしめた小さなごぶしをちからいっぱい、せいっぱいのばして。男の子は何ひとつ持っていないはずでした。とおきたままのかっこうで、はだしのまま、家をとびだしていたのです。それでも男の子は、夜空の星にむかつて手をのばしつづけました。

なみだが、ぼとり、ぼとりと落ちていきました。男の子にはわかっていたはずですが。もう何をしても、むだなんだと。でも、それでもなみだは、とまりませんでした。

男の子は家にもどりました。にぎりしめた小さな手のひらを開いてみます。

そこには花の種がありました。男の子はひとつぶの花の種をにぎりしめていたのです。

冬には夏が恋しくなって。
夏には冬が恋しくなって。

そんな気持ちをお話にしました。

冬と夏は、出会うことができるのでしょうか？
おてんば娘コッペリアと一緒に探しに行きませんか？



冬の国、夏の国
美鈴

あるところに、冬の国がありました。
冬の国の人たちは夏を知りません。
またあるところに、夏の国がありました。
夏の国の人たちは冬を知りません。

冬の国では、家族で温かい鍋を囲んでいました。

「みんなっているとあったかいわね」

お母さんは、コッペリアの頭をそととなでました。

おてんば盛りのコッペリアは、お部屋の中でストーブにあたって、おとなしくしているのに、すっかり飽きていました。

外で走りまわりたいけど、外にはたくさんの洋服に分厚いコートを着て、マフラーに耳あてまでしないと、寒くて寒くて居られません。

「わたしシャツ1枚でお外を走りまわりたい」

「何を言ってるの、そんなことしたらすぐに骨まで凍ってしまうわよ」

お母さんは、熱々のカブのスープをコッペリアの器によそってくれました。



「コッペリア、夏の国を知っているかい？」

おじいちゃんは、とっても物知り。ゆっくりメガネを上げながら話し始めました。

「なつ？ なになに、教えて！」

コッペリアは、いろいろな話をしてくれるおじいちゃんが大好きです。

ついこの間はシロクマ対アザラシについて詳しく教えてくれました。

「夏はそうさ、寒くないんだ」

「寒くない？ じゃあシャツ1枚で走れる？」

「ああ、もちろんさ、みんな水着というパンツみたいな服で、かき氷ってやつを食べる」

「かきごおり？」

「かき氷は、雪にシロップかけたやつさ」

コッペリアは、体の奥がうずうずとしてきました。

「夏の国はどこにあるの？」

おじいちゃんは、あたためたワインを飲みほしました。

「うん、すごーく遠くさ、それはそれは遠く、おじいちゃんも行ったことがないぐらいにね」

「どうやったら行けるの？」

うつらうつらと目を閉じ始めたおじいちゃんの腕を、コッペリアが、ぶんぶん揺らします。

「……それは、夏のあたたかい風にのって……」

お母さんがおじいちゃんに、そっと毛布をかけました。

「もう、おじいちゃんまた寝ちゃった〜」

コッペリアは、がっかり。だって、生まれてから今まで温かい風に吹かれたことなんてありません。

こんな時の相談相手は、弟のクランです。

「クラン、夏の温かい風、だって！」

「お外は雪がまじってる風しか吹いていないよ」

冬の国は1年のほとんどが雪です。

まつげはすぐに凍っちゃうし、学校だって体育は暖房のきいた体育館。

遠足はいつだってスキー教室です。

「ストーブの風はあったかいよ！」

そう言うと、コッペリアは、ストーブの前に立ち、クランに後ろから風を送ってもらいました。

「あったかい！ あつい！ ちょっと仰ぎすぎだよクラン！」

次の日からも夏の風を探しました。お風呂の湯気を浴びてみたり。

部屋の中でいっぱい洋服を着こんでみたり。けれど、なんにもおきません。

『かきごおり』食べようよ！ 雪ならいっぱいあるもん！」

コッペリアは外に飛びだしました。

コッペリアのひらめきに、クランがシロップ代わりに持ってきたのは、はちみつ。
雪をお皿にのせて、はちみつをかけて……

「早く食べなきゃ！ はちみつが固まっちゃう！」

「おねえちゃん、寒い！ 寒いよー！」

ひと口食べただけでふたりとも、体の芯から凍るように冷えていきます。

「だめだ！ お部屋にもどろう！」

家の扉を開けると、ストーブで暖まった、もわっと温かい空気が迎えてくれました。

「夏の風ってこんな感じかな？」

その時です。コッペリアの体は暖かい風に包まれました。

ザザーン、ザザーン

「何の音？」

それは波の音でした。それに、外にいるのに、じんわりと汗をかいていました。

コッペリアは冬の国のかっこうのままだったのです。

「君、何そのかっこ？ 暑そう！」

浜辺に座り込むコッペリアをのぞきこんだのは、小麦色に日焼けをした男の子でした。

「わ！ 裸？」

「水着だよ！ ぼくシャンプー、きみは？」

「わたし、コッペリア」

コッペリアは、暑くて耳あてを外して、マフラーをとりました。

「もしかして、ここは……夏？」

「そうだよ、へんな子だな～」

「やった！ わたし、夏に会いたかったの！」

コッペリアは跳びあがって喜びました。するとまた汗がじんわり。

コートを脱いで、セーターを脱いで、中に着ていた長袖のシャツと短パンだけになりました。

「わぁこれでもまだ暑い！ なんて不思議なのかしら！」

「海に入れば気持ちいいよ！」

シャンプーが指さす方を見ると、透き通ったブルーの海が、どこまでも続いていました。

それはまるで、コッペリアが好きなソーダ飴の色でした。

「これが海なの？ 入っていいの？」

コッペリアが知っている海は、いつでも氷が張っていて、そしておじいちゃんが話してくれた、シロクマ対アザラシの舞台。

入るなんて、とんでもない場所です。

「でも、シャンプーみたいな水着、ないよ？」

「大丈夫！ 洋服で入ったって、すぐに太陽が乾かしてくれるよ！」

そう言うと、シャンプーはコッペリアの腕をひっぱりました。

コッペリアはあわてて2枚重ねの靴下を脱ぎました。

「わぁ」

足に触れる海水は、コッペリアが今まで知らない、スーっとした気持ちにさせてくれました。

「気持ちいい！ ねえ、今、魚がいたよ！ 青い魚！」

初めてのことで、暑さとわくわくで、コッペリアは頭から湯気が出そうです。

しばらく海で遊んでいると、ふたりは遠くから女の人に呼ばれました。

「シャンプー、お友達なの？ かき氷できたわよ～」

「はい！」

どうやら、シャンプーのお母さんのようです。

「おいでよ、コッペリア」

シャンプーの住む家は海から走って10秒。

外にベンチが置いてあります。お母さんが用意してくれたかき氷は、

イチゴシロップにバニラアイスの乗ったスペシャルバージョン。

「本物の『かきごおり』だ！ わたし、初めて！」

シャンプーとお母さんは首をかしげます。

「食べたことないの？」

「うん！ わぁ！ 甘い！ 寒くない！」

シャクシャクと勢いよくかき氷を食べていると……

「ん！ 頭いたーい！！」

コッペリアは、ふたりに笑われてしまいました。

「ねえ、ここには雪が降らないの？」

『ゆき』ってなに？」

コッペリアは、びっくり！

「雪を知らないの？ 空から降ってくる白くて冷たいのだよ！」

「コッペリアちゃんは、どこから来たの？」

シャンプーのお母さんが聞きました。

「冬の国だよ！」

「え！ 冬の国？ おばさん、子供の時に聞いたことがあるわ、本当にあるのね」

コッペリアは、冬の国の事を色々教えてあげました。



話している間に、びしょびしょだったはずの洋服はすっかり乾いて、
ギラギラだったはずの太陽は、夕日に姿を変えようとしていました。

「コッペリアはどうやって帰るの？」

「え？」

そもそも、コッペリアは自分がどうして夏の国に来られたのかも、よくわかっていません。

夏に会いたいと思っていたけれど、家に帰れないのは困ってしまいます。

「帰れないなら、ずっとここにいればいいよ！ でも来た時はどうやってきたの？」

シャンプーがコッペリアの顔を心配そうにのぞきこみます。

「えーと、外は雪が降っていてね、寒いからお家に入ったら、

ストーブのあったかい風が吹いてきて……、そしたらここに」

「それなら、家に行こうよ。家の中はクーラーがきいていて、涼しいよ！」

暖かい部屋に入って夏の国に来れたのです。今度は涼しい部屋の中に入ったら、

冬の国に戻れるかもしれません。

コッペリアは、ほっと安心。

「またすぐ会えるね、お母さんが心配するから、一回帰るよ！」

コッペリアはそう言うと、元気に手を振ってシャンプーの家のドアを開けました。

キーン

扉を開けると、ひんやりした空気がコッペリアの顔に当たって外へ出て行きます。

「わ、冷たい風！」

・・・

しかし、何もおこりません。

「あれ？」

「おかしいね」

涼しい部屋の中、ふたりは腕組みました。

「ねえ、シャンプー、あれはなに？」

コッペリアが指さしたのは、花火です。

シャンプーの家の玄関には、花火がたくさん置いてあったのです。

全然違う環境に生まれたふたりですが、どうやら共通点は、くよくよ悩まないこと。

「よし、花火しながら考えようよ！」

日はすっかり落ちて、あたりはすっかり夜。

真っ暗になった海には、明るい月が反射しています。

空にはキラキラと、雪の結晶が暗闇につかまったような星空が広がっていました。

「こうやって、先っぽにローソクの火を近づけるんだよ、あ、気をつけて」

「わあ！ きれーい！」

花火の先からは、シュワシュワと次から次へと火花がこぼれ落ちていきます。

もちろんコッペリアは花火も初めてです。

前にシュワー！ととび出る花火、足元でくるくると回る花火、横にパチパチと広がる花火、

中でもお気に入りには線香花火。

パチパチ、パチパチ、シュワ、ジュワ、シュワシュワシュワ …ポトン

「あ！」

オレンジ色の小さな小さな火の玉が、砂浜の砂に吸い込まれていきました。

「シャンプーはいいな、毎日楽しそう」

「楽しいけど、夏だって、いいことばかりじゃないよ」

シャンプーは、虫がいっぱいいることや、食べ物腐りやすいこと、いつだっかのどが渴いていること、
台風がたくさんくる事を教えてくれました。

「ぼくも、行ってみたいな、冬の国」

「おいでよ！ お母さんの作るカブのスープ、とってもおいしいんだよ」

「うん、『ゆき』っていうのも見てみたい」

「冬の国に来たら、一緒に雪だるまを作ろう！」

花火はとってもきれいだけれど、冬の国のことを話していたら、家に帰りたくなってきました。

あんなに夏にあこがれていたのに、やっぱり冬の国が、自分の住むところだと思えてきたのです。

「あ、おばあ」

浜辺を歩いてやってきたのは、おばあちゃんでした。

「となりの家の、おばあだよ」

おばあちゃんは、シャンプーのお母さんから事情を聞いて来たようでした。

「うちの裏に四季の草って言うのがあるさ〜。古い言い伝えだが、ものは試しだ、やってごらんさい」

おばあちゃんの話では、四季の草に触れながら今いる場所と違う場所のことを強く思うと、季節を超えられるというのです。

けれど、それは選ばれた少しの者だけ。

おばあちゃんは昔、おばあちゃんから、そう聞いたんですって。

「ぼくも冬の国に行けるの？」

「シャンプーが選ばれたものなら、行けるさ〜。でもな、一度行ったら、四季の草のつるは枯れちまう」

シャンプーが、がっかりすると、おばあちゃんは、けらけらと笑って言いました。

「なに、うまくいけば、また四季の草、みつければいいだけさ〜」

ふたりは、おばあちゃんに、四季の草のあるところへ連れて行ってもらいました。

四季の草は、特別な植物のように見えません。へちまのように壁にツタをはって、小さな白い花をつけています。

「少し、さみしいな。また会えるかな？」

「会えるよ。ぼくが行くよ、冬の国に！」

「うん」

「あ、待って」

シャンプーは家まで走って戻って残りの花火を持ってきてくれました。

「弟と一緒に花火してよ」

「うん、ありがとう！」

「準備はいいかい、お家に帰りたいと強く思うんだ、いいね」

コッペリアは、おばあちゃんに向かってうなずくと、四季の草のツタに触りました。



「お家に帰りたい。わたしの生まれた国に」

ピュ〜ピュ〜

「わ！ 寒い！」

コッペリアは、腕まくりしたシャツに、短パン、足なんて、はだしのままで冬の国に戻ってきてしまいました。

あわててドアのノブに手をかけると、そこには茶色く枯れたツルが巻き付いていました。

「四季の草？」

「お母さん、ただいまー！」

バタン。





小野 今回の冊子を作ることになったいきさつは何

だったんですか？

なかの どうでしたっけ？

実鈴 五月でしたよね。

なかの そうそう、思い出してきました。五月に高円寺のヒトソラというギャラリーカフェで、実鈴さんが参加されている絵本創作ユニット、ペロンペロンドロップス（以下ペロン）の展示が行われたとき、そういう話をさせていたんでした。

実鈴 わたしたち、ペロンの結成記念日に合わせて

絵本『ボカスカバス』の発表会をやっていたんですよ。

なかの そうでした。ぼくは発表会には行けなかったのですが、その後しばらく、会場となったヒトソラで『ボカスカバス』のラフ原画展が行われていましたので、そのときお会いしたんです。

小野 じつはその展示会、わたしも密かに行ってま

す。

実鈴 そうでしたね。お会いできませんでしたが、名前が書いてありました。

なかの 実鈴さんとは、新作を持ち寄って、おたがいの活動のPRになるような冊子を作りましょうねと、お話しさせていただいたんです。



なかのたいとう

Interview

実鈴

interview & photo ONOYUKA



なかの

子どもの世界って大人が思い描くほど綺麗でも可愛らしいものでもないと思っています。ぼくはそういった子どもが持つネガティブな要素も含めて実鈴さんのお話しには子どもの生の心が表れていると思っています。

実鈴

それって、わたしの性格が悪いっていうことなんじゃないか。ちがうでしょ。ちがいます。

小野

最後に、おふたりの今後の活動の方向性を。わたしは絵本を作っていきたいです。アプリの絵本が子どもたちに喜ばれていること知っています。紙の本がなくなることはないと思っています。ぼくも同じ認識です。紙の本は残ると思っています。ただ文庫本や新書の類は近いうちになくなるんじゃないでしょうか。そうした電子

なかの

廉価な本はすべて電子



小野

実鈴さん、なかのさんの『夜空の星と一輪の花』を読んでどうでしたか？描写に厚みがありますよね。わたしは会話を重ねてお話しを作っていくんです。なかのさんのお話しは情景描写が積み重なってお話しができています。

実鈴

好みの問題かもしれませんが。ぼくは情景描写を重ねるのが好きなんです。でも、わたしにはできません。そんなことはないと思います。ぼくは深みや厚みのある物語を書きたいと常に頃から考えています。父から子へ、祖父母から孫へ。童話は百年読み継がれる読みものです。そういった息の長い作品を作っているというのをぼくは常に意識して書いています。

なかの

実鈴

では、なかのさん、実鈴さんの『冬の国』、『夏の国』を読んでどうでしたか？このお話しだけではないのですが実鈴さんの書くお話しには生の子どもたちの感情や感覚が表れているように思います。表現が幼いといふことでしょうか？

いえ、そういった表面上の問題ではないと思っています。そこには子ども特有のリアリティがあるように思います。大人の目線から子どもの世界を俯瞰してしまうと、概してその世界はノスタルジーに染まって見えるものです。でも実鈴さんのお話しは、少なくともノスタルジーを直に感じるようなお話しではないですね。そうかもしれません。

小野

なかの

実鈴

なかの

書籍に置きかわっていくと考えています。でも逆に絵本やハードカバーの本は愛蔵版として高値で取引されるようになることも考えられます。紙の本は欲しいと思っただけが買うようになるということ。そういった状況でも作家を続けていきたいと考えているのでしょうか？

実鈴

小野

それは未来の、そして世界中の子どもたちのためにお話しを書きたくていくという行為そのものに充実感を感じながら日々生活しています。続けられる限り続けていきたい。そう思っています。わたしも同じです。こつそりとはあっても、ずっとお話しを書き続けていきたいです。

なかの

実鈴

書き続けていきたいです。



遊食家 Boo

〒110-0005
東京都台東区上野 5-9 2k540 AKI-OKA ARTISAN N-4
平日 ランチ 11:30 - 14:00 ディナー 17:00 - 24:00
土日祝 11:00 - 20:00

Tel / Fax 03-6240-1220
<http://www.uamou.com/boo/>

Side by Side

綺麗な色や
濁った色

目には見えないオーロラ色

たくさんの愛をかき集めて
一冊の本が出来ました。

この本を通じて
あなたと出会えたことに
幸せを感じながら

日々の愛を
育んでいきたいと思えます。

writer

なかのたいとう
実鈴

photographer

小野祐佳

Print

杉本 浩章

発行日 2012.09.21
発行者 なかのたいとう



小野祐佳

広島県出身 東京都在中
穴吹デザイン専門学校卒業後、フリーランスフォト
グラファーのアシスタントを経て独立。
人や物の魅力を最大限に伝えるため写真を撮っています。



ファッションフリーペーパー [How are you? vol.3]
10月中旬～全国配布予定

<http://www.onoyuka.com/>



実鈴

misuzu

1984年 東京に生まれる。絵本、童話作家。
作品のテーマは「明日おこるかもしれないわく
わく」2010年 絵本作家3人による絵本創作グ
ループ「ペロンペロンドロップス」を結成。
おはなしと、のほほんを担当。

2011年 デザインフェスタ出展
2011年 NHKBS 熱中スタジアム出演



ボカスカバス
この絵本をカラーで出版するのが今の夢！

<http://ameblo.jp/misuzunoburogu/>



なかのたいとう

中野苔桃

1970年 北海道生まれ。童話作家。
百年後の世界に生きる子どもたちにむけて、今伝えな
ければならないことをテーマに、童話、児童小説を書
いています。趣味は思索。ロマンチスト。空想少年。
現在の活動の中心はブログと東京の秋葉原になります。

2012年9月 THE TOKYO ART BOOK FAIR 2012 出展



絵本『ねずみのらんす』初版
なかのたいとう 作 かわたつゆうき 絵

「ねえ、らんす、いいかい？ ほくのために
がんばるんだよ。きみは、だれよりも、あ
しがはやいんだ。きつとかてるんだから。
だから、いいかい？ がんばるんだよ」
ねずみのれーすのはじまりです。ぼーん、
というあいずとともに、ねずみたちは、いっ
せいに、はりははじめました。

<http://ameblo.jp/nakanotaito/>
nakanotaito@me.com